

---

# マリアとヨセフ

藍絃

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

マリアとヨセフ

### 【コード】

N0808C

### 【作者名】

藍絃

### 【あらすじ】

誰かが呼ぶ声がする、でもそれが誰のものなのかわからない、俺は見知らぬ場所で俺と同じ年くらいの少女と出会う、彼女とのつかぬ間の会話は何も覚えてない俺に何かを思い出させていく……

「ねえ、・・・！ 目を開け・よ！！・・・ね・・・！！！」

ああ、誰かの声が聞こえる、でもだめだ、今の俺は。

目を開けたら知らない場所にいた。名前も知らないそこは綺麗なところで俺は言葉を失った。

誰にも犯されない美しい場所、俺は辺りを見回してみた。誰もいない、それどころか俺以外の生きているものの気配さえもない。

一体此処はどこだ？

人も動物もないこの場所に俺は一人で立っている、それを再度確認して寂しさを覚えたがよく見れば俺以外にも人がいることに気が付いた。

いつの間に？

「なあ」

俺はとりあえず声をかけてみることにした。その人は俺に気づくと驚いたようにしてこちらへと近づいてくる。

その人はどうやら少女のようで少し短めな桃色のスカートをはいていた。上着の方は白い半そでで、髪の毛はとても艶があつて腰の辺りまでしなやかに流していた。

今までにこんな綺麗だと思う人はいなかった。不思議な、少女だな。

「こんなところに人がいるとは思わなかったよ！　こんにちわ！！」  
少女は思ったより元気がよく俺を驚かせた。　そして挨拶をされたので俺もとりあえず挨拶を仕返す。

「こんにちわ」

「うーん、　こんなところで人に会えるとは思ってなかったわ、  
あなたは誰？」

そう聞かれて俺は驚いた。　名前も何も覚えていなかったからだ。  
よく考えれば自分の名前もどこで生まれたのか、　そして何故ここにいるのか、　何も覚えていないのだ、　せめて名前だけでも思い出そうと記憶を探る俺だが記憶についても何も思い当たることがない、　むしろ自分に記憶があったのか、　といことを疑う羽目になった。

混乱している俺に少女は薄く笑って俺を見た。

「覚えてないのかしら？」

「ああ、　そうみたいだ、　君は？」

とりあえず少女の名前だけでも覚えておこうと聞くと少女は驚いた顔で俺を見て、　すぐに笑顔になる。

「私は安来<sup>やすきや</sup>マリアよ」

「マリア？　どついつ字を当ててるんだ？」

よく聞くような名前、一体どこで聞いたんだ？　だが今の俺に思い当たることはない、ただ、少しだけ思い出した気がした。マリアとは一度会っている、そのことを思い出せただけでラッキーだ。

「何も、実を言うと私ハーフなんだ」

マリアの顔が悲しみに沈む、昔に何かあったのだろうか？　そしてマリアの瞳をよく見るとその瞳は澄んだ緑色をしている。

日本人ではありえない色。きつと差別で苦しんだんだろうとマリアのことを知らない俺でもわかった。

「そうか、綺麗な瞳だな」

素直な感想を言ってやるとマリアはこれ以上はないというくらいの笑顔を見せて、俺にも同じように褒め言葉をくれた。

「ありがとう、あなたも綺麗な青い瞳をしているよ！」

「え………?」

俺は右手を目の前へともっていき、青い瞳？　なら俺もハーフということなのか？　驚きを引きずったまま、注意深く服装などを見してみる。

服装は何故かジャージ、そして靴は日本製と思われる運動靴、服装については特に変わったところはない、髪の毛を見てみればそれは、

「金色？」

さらりと肩の辺りまで流れている髪の毛はどこからか差し込む光によつて輝いている。

ありえない、俺が覚えている限り髪の毛の色は黒、黒？  
どうして知っているのだろうか？　マリアが不思議がって、俺の顔を覗き込んでくる。

その仕草は俺と同じくらいの年の女子には思えないくらいあどけなくて……、自然と俺の目から涙がこぼれてきた。

やばい、何か情けない、でも、止まらない、マリアが驚いて慌てるが俺の目からこぼれる透明な雫は止まらない、途方にくれたマリアが声をかけた。

「何が悲しいの？　それとも嬉しいの？」

さえずるような声だった。

どこかくすぐったくって、恥ずかしくなって、何で泣いたのかわからない。

「わからない、わからないんだ」

何が悲しくて何が嬉しいのか、それが今の俺はわかっていなかった。

ただ、涙だけがこぼれる。　どうして？

「そう、ならきつとあなたは幸せなのよ私と違ってね」

「どう、して？」

「だってあなたには　」

あなたには　の続きを聞こうとした俺の視界が急に大きくぶれた。

それどころか立っていることさえできずにその場に倒れる、地面がない　そう気づいたときにはもう遅く俺は真っ坂さまに落ちていた。

「うわああああっ!!」

「ヨセフっ！　ヨセフ?!」

誰だ　？　俺を呼んでいる・・・俺はゆっくりと目を開く、そして初めて視界に入れたのはくたびれた顔をした女性。

俺とはまったく違う黒髪、黒い瞳の、俺の中で全てがはつきりとクリアになっていく、女性は俺の母親で、日本人で俺の父さんは外国人・・・それで、そうだ、俺は車にひかれたんだった。

高校からの帰り道、友達と他愛のない会話をして、それぞれ家に向かって別れたんだ、その後学校に忘れ物をしたのを思い出して道を引き返した。

『自己多発、注意!!』の黄色く、目立つ看板を通過して細めな道を抜けたその瞬間に視界が暗転した。

急な衝撃と体を打った痛み、そこから先の記憶はない、ただ気を失う前に誰かが叫んでいた気がする。

それが誰なのか、知っている子のはずなのにわからない。

「かあ、さん？」

「ヨセフ！　よかった。目を、覚ました・・・」

「俺、生きてるんだ」

ぼつりとこぼした言葉を拾った母親が俺の肩を掴んだ。

「馬鹿なこと言わないで！ 事故を起こしたって聞いた瞬間、頭の中が真っ白になったわ！！」

憔悴しきった顔で怒る母親、みきみじこ美木三智子は泣きながら怒っていた。心配してくれていた。それが嬉しかった。でも、何かが抜け落ちていく、それを思い出そうとした瞬間ふと頭をよぎったのは緑の目の少女。

「そうだ、マリアは？！」

「マリ、ア？ 誰のことかしら、もしかしたらガールフレンド？」

冗談めかして言う母さん、何かがおかしい、母さんは知らないのだろうか、なら彼女は誰だったのだろうか。確かめないと。

「ヨセフ？！」

母さんが驚く、それでも俺は行かなければいけない、そんな衝動に駆られて痛む頭とうまく動いてくれない右腕と右足をひきずって歩いていく。

ベッドの近くにあるデスクに立てかけてある松葉杖を見つけたのでそれについていく、ただそれを母さんは許そうとはしない。

「やめて！ まだ傷は治っていないのよ！？」

「それでも」

行かないと、とうとう母さんは目を瞠り、そして諦めたような笑みを浮かべる、その顔には慈愛に満ちた笑みがあつた。

「……仕方ないわね、いつてらっしゃい、あまり無理はしないでね?」

「わかつているよ、母さん」

そうして笑いあうと俺は振り向かないで歩き出す。

向かうべきは見舞い客の受付、病院内の構造は頭に入っていることからよく来る市立病院だということがわかった。

それだけで十分だ、俺はエレベーターを使って一気に4階から1階へと降りる。あつた。受付だ、あそこでなら何か聞けるだろう。

「あのお」

「はい、あら、ヨセフ君、目が覚めたのね、何か御用かしら?」

受付をしていたのは俺の友達の姉、これなら話がしやすい。

「安来マリア、と言う名前の子が見舞いに来てたりとかしてませんか?」

「安来、マリア……その子、確か……」

何かに対して言いよんでいる、マリアになにかあるのだろうか?

「何かあつたんですか？」

「ここで言えるようなことではないわ、彼女なら412号室にいるから、会ってあげて」

これで話は終わりだ、と暗に言ってくる彼女はすぐに他の見舞い客へと話しかけ始めた。とにかく412号室に行こう、そう考えてまたエレベーターへと向かう、エレベーターはすぐ下りてきたので早くもエレベーターに乗る。

そして“4”と書かれたボタンを押す。俺以外にエレベーターに乗る人はいない、その分静かでモーター音だけが聞こえる、軽く振動してエレベーターは4階へとついた。

4階の12番目の部屋、それはすぐに見つかったが周りの雰囲気気が普通の病室とは違う気がした。

それでも俺は412号室の扉を叩いた。反応はない、とりあえず俺はお邪魔しますとだけ言って部屋の中へと入る。

冷たい、外は真夏の日差しによって暑いだろうにここだけは真冬のように寒い、窓のカーテンは締め切られ、明かりがとても頼りないものに見えた。

「マリア？」

シユコー、という呼吸音が聞こえる。俺はある種の不安に狩られてマリアのいるベッドの周りを覆うカーテンを開けた。

白い、呼吸器をつけた顔も、死人のように組まれた手も、首に巻かれた包帯も。

「嘘だろ？　なあ、マリア」

声をかけてもマリアは口を開かない、ただ呼吸をするだけで、

短い間の対面、それでも記憶に残ったあの笑顔、それが見たかった。

でも目の前にいるマリアは目を閉じたまま、笑いもしないし悲しんだりもしない、何故か悔しさがこみ上げてくる。

「どうして……！！」

また涙がこぼれそうになった瞬間、締め切つてあるはずの病室に風が吹いて囁く、

(だってあなたには呼んでくれる人がいるから)

わかったよ、マリア　マリアがあの場合での別れ際に言った言葉、俺は静かに深呼吸をすると優しく囁く。

「マリア」

と。

囁いた一言。それに呼応するかのようにマリアの白い顔のまぶたが震え、隠された綺麗な緑色の瞳が外へとさらされる。

マリアはすぐに呼吸器をはずし、真っ直ぐに俺を見た。

「呼んで、くれたんだね、ヨセフ」

「ああ、やっと思い出したよ、マリア」

マリアと一度だけ会った。それは彼女が制服のスカートを切り裂かれた状態で涙をこらえながら帰っているときのことだった。

丁度その時俺は一人で帰っていてマリアと鉢合わせしたんだ。

「スカート、 どうしたんだ？ って聞いたな」

「えっ?! て驚いてたよね、 私」

「その後俺、 馬鹿なこと言ったな」

「『いじめられたのなら俺が助けてやるよ!』 そういつてすぐに走って帰ってっちゃったね」

「でも、 助けられなくて、 逆に助けられたな」

話していてマリアと会ったあの場所がどこなのか、 なんとなくわかった。

きっとマリアがいなければ俺は 。

「いいの、 だって、 助けてくれたでしょ？ お返し!」

「………ありがとう、 なあ、 マリア」

「なあに？」

「退院したらさ、 どこか出かけないか？」

それは、 今の俺にできる精一杯のお返し、 マリアはすぐにあの場所で見えた以上の笑顔でうん、 と頷いた。

「それじゃあさ、 早く治そうな」

「うん! あなたもね、 ヨセフ」

「また、来るから」

「約束ね!!」

マリアと約束をした。一旦俺は病室の外へと出る、マリアに何があつて、どうして入院していたかはあえて問わない、俺は深く深呼吸をして自分の病室へと戻るべく歩き出した。

マリアと俺は偶然によつて出会つて偶然によつて助け合った。

それでも俺はその偶然に感謝して生きていこうと思う、そして、

マリアに会つて、彼女を助けられたことも、もちろんそうだ、

さあ、早く治してマリアでも楽しめるような場所を探さないと  
な。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0808c/>

---

マリアとヨセフ

2008年11月7日06時46分発行